

十勝の都市圏構造

十勝地域は、東・西・北の山脈で他地域と明確に分かたれている。海岸沿いの一部を除いたほとんどが十勝川の流域に属し、人口 35 万人余りが単一の商圈、経済圏を形成している。道内にも、これほど区分のわかりやすい地域はない。

しかし十勝は大きい。面積で都道府県5位の新潟と同等の広さがあるのに、新潟県の7分の1の数しか人が住んでいないのだから、土地利用のスケールが違う。そのような中、十勝の中心地・帯広の都市規模を把握したければ、どのようにすればよいのだろうか。たとえば釧路と帯広は、本当はどちらが大きい町なのだろう。

帯広市の人口 17 万人に対し釧路市 19 万人、というのは行政区分にとられすぎた見方だろう。帯広と音更は、十勝川を挟んではいくが一体の都市圏を形成している。釧路市と釧路町を区分するのも、市民生活の実態からいえば無意味だ。だが、土幌や池田まで帯広都市圏に入れてしまうというのも、やや実態に即さない感じがある。

全国の都市の規模を客観的に比較する手法として、「国勢調査結果を用いた 10%通勤通学圏」という考え方がある。A市(町村)に住んでいる 15 歳以上の就労者(自営含む)と通学者のうち、10%以上がB市(町村)に通っている場合に、AはBの都市圏に属するとするものだ。

2000 年の国勢調査結果を現在の行政区分で換算し、この方法で分析すると、帯広都市圏は、帯広市 + 音更町(帯広への通勤通学率 34%) + 幕別町(同 30%) + 芽室町(同 23%) + 中札内村(同 11%)となる。帯広市に東西南北に隣接する町村が加わった形だ。都市圏全体の人口は 26 万人となり、釧路都市圏(釧路市 + 釧路町 + 白糠町 + 鶴居村)の 22 万人を上回っている。大方の実感に即するのではないだろうか。

道内主要都市圏の人口規模を同じ手法で計算すると、札幌(237 万人)を別格として、旭川(41 万人)、函館(37 万人)の次の道内4位に帯広が来る。次いで釧路、苫小牧(20 万人)、室蘭(19 万人)、千歳(16 万人)、北見(13 万人)となっている。

全国で見れば、都市圏人口 26 万人というのは津(三重)、鳥取、松江(島根)、山口などと同規模だ。百貨店が一つ成り立つかどうかぎりぎりの大きさが、県庁所在地下位クラス並みの中核性は十分あるとも言えよう。

とはいえ市町村合併が進ちよくしていない十勝では、上記の通り同じ都市圏が複数の自治体に分かれており、その分都市圏全体をにらんだ都市戦略づくり、まちづくりが行われにくくなっている。その結果がたとえば、人口増加にインフラ整備が追いつかない十勝川北岸地区や、年々寂しさを増す帯広駅北側地区の光景ではないだろうか。

十勝という意識、各市町村ごとの意識とは別に、帯広都市圏としての意識を持つことが、これからの都市間競争の時代には求められている。